

男あそび

半村 良

男あそび

昭和四十九年八月十日 初版発行

著者 半村良

発行者 増田義彦

発行所 実業之日本社

本社 東京都中央区銀座一―三―九

TEL 〇三(五六二)四三二一

振替 東京三二六番 〇一〇四

関西支局 大阪市北区真砂町五三

TEL 〇六(二三三)一七〇六

印刷 明善印刷 製本 共文堂

乱丁、落丁の場合はお取り替えます

男
あ
そ
び

半
村
良

目次

御存知美男燕	5
虫のしらせ	29
いそがしい旅	53
一見少女風	75
鹿の精	99
たのしい二日酔	123
博多の女	147
女たちは泥棒	171
男あそび	195

御存知美男燕

十一時ごろ悠子は電話をかけた。電話は入口の近くにとりつけた壁かけ式のもので、カウンターのかげになるから、店の中から電話をしている姿は見えない。

店は今夜もかなりたてこんでいる。先方の出るのを待っていると、客が一人悠子のうしろを通過してトイレのドアへ消えた。そして電話がおわる頃出て来ると、

「問題だぞ。誰とデートなんだ」

と言って肩へ手を置いた。

悠子は肯定とも否定ともつかぬ微笑を見せて頷き、「ではそういうことに。よろしくお願いいたします」と言って電話を切った。客はまだ肩に手を置いていて、悠子はその手を気にした。不潔だと思った。

その客は由比と言い、不動産会社の営業部長であった。髪をきちんと七・三に分け、いつも濡れたように光らせていた。骨太で頼もしいタイプなのだが、悠子はそういう骨っぽさが苦手だった。脂っこくてやりき

れない気分になるのである。

由比は悠子の肩に手を置いたまま席へ戻ろうとした。

「ちょっと失礼」

悠子はわざとよそよそしい言い方をしてカウンターの前で体をひねり、その手を外した。

「来いよ、ママ」

由比が手を引っぱった。

「すぐ行くわ」

客とホステスの背中が並んだカウンターで、そんなやりとりがあつて、結局悠子はあいたスツールのひとつへ腰をのせた。

由比は自分の席へ戻って行き、部下らしい若い男たちに聞えよがしの大声で言う。

「ママに振られたよ」

「また口説いたんですか」

「ああ。彼氏に電話してやがる。あれは今晚浮気する

つもりらしいぞ」

おかしいもので、席に坐っている客の大声は意味のない音になるが、テーブルとテーブルの間の通路に立って高い声を出すと店中にはっきり聞える。由比の声も、そのあとすぐ坐ったらしく、他の席の笑い声に紛れてよく判らなくなった。

なんとなく、悠子はやり切れない気分になっていた。いつもなら軽くないなして、そう気にも留めない客たちの態度が、今夜はいちいち心にささる。突きささるというほどではないが、自分の好みが先にたつて、好みでない客の傍では、水商売のいやらしさを感じてしまふ。

たとえば今の由比にしても、こんな商売をしていなければ、トイレから出たばかりの手で肩を掴まれたり手を握られたり、されるはずもないと思うのだ。あんなことをしなければ、由比の席へ行つてやるはずだっ

ただのだけれど、不意に機嫌が変わって、カウンターへ逃げてしまった。逃げれば逃げたで、大声で今晚浮気のどうの……。

と、酒場ぐらしについてまわるほんのささいいやらしさがいちいち腹立たしく、

「私にもブランデー・サワー」

そうバーミンに命じた。客の間へ割りこむようにして坐ったその両側は、どちらも馴染客で、そのブランデー・サワーの勘定がどちらの客の伝票につくかは、悠子の顔の向きひとつできまるものである。

悠子は左を向いた。

やに止めの短いホルダーにセブン・スターをさし込んで啜えた若い男の顔があった。

「ほんとに浮気の電話……」

美男であった。年は二十五くらい。見た瞬間、あたりを洗い流したような清潔な感じにさせる雰囲気を持

っている。身長は一メートル七十か七十二くらい。首から上が小さいから、それでなくてもスマートなのが、余計スマートに見える。無地の白っぽいスーツを軽い感じで着こなし、ピンクのカラー・シャツにノーネクタイ。無雑作にボタンを幾つか外し、女のように白い胸の辺りに、やや太めの金鎖が覗いていた。

「何よ、あんたまで」

悠子は無愛想に言ったが、ふと気分が落着くのを感じた。

もともと好みのタイプだったのである。客がみなこういう男たちなら苦勞はないのと思った。さっきの由比などとは大違いだ。たとえてみれば、由比はボマードの感じだが、この美青年はオーデコロンか。そのくせ骨格は似たようなのに、由比のほうがずんぐりして見える。

「田村君、まだ続いてるの」

悠子はブランド・サワのグラスを受取りながらさり気なく尋ねた。

「続いているかって、何のこと」

田村は悠子の瞳をのぞきこむように問い返す。悠子はそのほうに体を寄せ、

「ロンのママよ」

と言った。

「ロンのママ……」

田村は怪訝な表情をして見せる。

「とぼけてもだめ。あんた有名なんだから」

田村は悠子から視線をそらせ、苦笑して茶色い飲み物に口をつけた。ウイスキーをコークで割ったコーク・ハイである。

「……一、二度だよ。それっきりさ」

弁解するように言う。

「若気のあやまちさ」

田村が真面目な顔で言ったので、悠子は笑いだした。気分がほぐれ、いつものようにさらりと客がさばけそうであった。

「おかしいかい」

「待っててね。すぐ来るから」

酒をひと口飲むと、悠子は田村の膝に手をかけて、するりとスツールをおりた。自分の手の圧力を弾力ある田村の筋肉が小気味よくはね返すのが判った。

本当を言うと、その時悠子はそのまま田村のそばで飲んでいたかった。だがそれでは客になってしまう。

この店は悠子の店だし、客の間をひらひらと飛びまわるのが彼女の仕事であった。

自分の機嫌が好転したほんの僅かのきっかけをとらえ、そのまま商売に持ち込んで行こうとするあたり、あたしもだいぶ経営者らしくなると、悠子は自分で自分を褒めてやりたいような気分であった。

テーブルからテーブルへ、うまく活気を注入しながら移り歩いた。席へ顔を出すと客のほうで話を中断させ、顔をあげて迎えてくれる。どこでも主役で、ホステスたちは悠子を引きたてる侍女にすぎなくなる。

別なやり方もあるのだが、悠子は自分自分の店のやり方を変える気はなかった。ホステスたちを立てて全体のまとめ役に引きさがるのは、もっと年をとってからでいいと考えている。まだ三十四なのだ。

「綺麗なママって言うと、壺の美子ママに、ロンの計子ママ、それにうちのママ……」

ホステスの章子が指を折って言った。あちこち流れ歩いて、そのたびに給料をつりあげているすばしい女であった。

「うちはボーナスを出しませんよ」

悠子はわざと事務的な表情で言った。買占めの噂がある商事会社の男たちが、そんな他愛もないことに声

を揃えて笑った。

「ロンというと、例の宝石商の……」

客の一人が言った。章子はひと膝のりだす感じで、

「そう。これよ」

と小指を立てた。

「凄い金持なんですって。だからロンのママは、毎週着物を買うの」

「毎週か。クラブのママが着るんじや、どうせ高いものばかりだろう。かなわんな、俺たちには」。

客が怯えたように首をすくめた。

「章ちゃん、誰れに聞いたのよ」

「呉服屋の安さんよ。計子ママのところへ毎週顔出なんですって。行くとび買ってもらうそうよ」

チクリ、とどこかにまた何かがささったようであった。

クラブ・ロンの計子とは、だいぶ以前同じ店で働い

たことがある。美貌も機転も同じくらいで、どちらも相手をライバルだと思っていた。自分の店を持つのは悠子のほうが小一年早く、その間だけ彼女は計子に対して優越感を味わった。しかし、すぐ計子は追いついて来た。あとから来ただけに、店の広さから内装に至るまで、すべてに計子のクラブのほうが上であった。

以前同じ店にいて水商売の基礎を得たわけであるから、客もクラブ・ロンとバー・百合花はかなり重複している面があった。従って今日に至るまで、相手の一挙手一投足が筒抜けに聞えてくる。おまけに経理士が同じという偶然が重なって、ライバル関係はいよいよ根深くなるばかりであった。

「どうしたの。浮かない顔して」

カウンターへ戻ると、田村は悠子の顔を見てそう言った。

「歯が痛いの」

悠子は大げさに顔をしかめて誤魔化した、本当は計子の着物の件が引っかけた仕方がなかったのである。

「痛そうだな」

「大したことないわ。それより、ロンのママと別れたって、本当」

「別れるも何もないさ。一、二度なもの。ああいう人と深入りする気なんてないよ。でも俺、損したな」

「なんで」

「ママまで知ってるなんて。中身のわりに噂がでか過ぎるよ」

「自分が悪いのよ。あの人、衣裳持ちでしょう」

「よく知らないけれど、何しろバトロロンが凄いからね。でもあんまりうまく行っていないみたいなきじだったよ。」

呉服屋のツケなんて、ひどいらしいからね」

「あらいやだ」

悠子は歯が痛いという芝居を忘れた。

「ツケなの」

「ああなんでもツケさ。それをこれに払わせるんで毎日知恵をしぼっているよ」

「計画性がないのかしら。案外だわね。あたしだって着物は買うほうだけど、呉服屋が次に来る迄にはちゃんとお金用意して待ってるわよ」

「すつと胸のつかえがおりた。」

「ママ、綺麗好きでしょう」

田村が占うような顔をした。

「ええ、なぜ」

「判るよ。綺麗好きなんって、そういうお金のこともちゃんとしているもの」

実際、悠子は支払いを延ばすのがひどく苦になる性質であった。

「計子さんのところは伝票もときどきおかしいんですっ

てね」

それは客に聞いたはなしであった。いくら飲んでくても、宵の口に素面しちやで来て、それも酒が強い客だったりすると、いつこうに座が弾まず、つい、勘定の取り方を手控えたくなる心理が店の側にはある。同じことだが、逆に大一座がメートルをあげ、ワツと入ってくると、大して飲み食いしていないのに、勘定を水増ししても許されるような気分になるものだ。

しかし悠子はそれをいましていた。だが計子のほうはそういうことの影響について心配してはいないらしく、かなり図太くやっているようだ。

そんな風だと長続きしないわよ、と悠子はクラブ・ロンのほうへ向けてときどき思うことがある。

そういう悠子と計子の微妙な葛藤の中へ、いつの間にか田村が入りこんでしまっていた。田村はカウンターのの上へ置いたグラスをのぞきこむような姿勢で、悔

いるように言っていた。

「酔ってたからなあ。ロンのママだって結構美人だし……やっぱり俺はだめなんだなあ」

「どうして」

「酔ってるからね。誘われたらついてっちゃうよ」

「いいじゃない。まだ若いんだし。そのくらいあたり前よ」

「でも失敗は失敗だ」

田村は思い直したように首を振り、一気にグラスを叩いた。おかしなもので、美男がそうすると、コーク・ハイがいかに苦そうに見えた。

「じゃ、ほんとにそれっきり……」

悠子はおやと思った。あたしはなぜこんなことを尋ねているのだらうと思った。そしてすぐ思いあたった。昨夜、小板橋は少し酔っていて、不能状態であった。彼はいま店に来ている商事会社の常務で、悠子のほか

にも二人ほど世話をしている女があった。

長年日本中を、いや世界中を駆けまわって遊びつくしただけに、夜の技術たるや、それはもう底の知れぬほどで、関係のできた当初、むこう一年間同じことをしたら即座に百万円払ってやると、冗談まじりに豪語したものであった。

実際、悠子は百万円もらい損なった。小板橋に責めたてられると、われながら情無いほど痴れ狂ってしまった、どんな体位をとられ、何をされたのかも判らぬほどなのである。

悠子もそれ相應の男出入りがあり、充分に体のことが判っているつもりだったが、小板橋とそうなつてからは、とうとう浮気ひとつせずに過してしまった。小板橋が触れて来ると、自分の肌の思ってもいなかった所までが鋭く反応し、二度も三度もたてつけに四肢を硬直させてしまうのだった。

「困った奴だ」

小板橋は、ときどき苦笑しながらそんなことを言うようになった。

その意味は、意外に堅い奴だったと、悠子を見直しているのだ。予想ではもうとうに浮気をし、自分と別れてくれているはずなのという苦笑である。その裏には、自分の卓越した技巧が、一人の女を完全にとりこにしてみたってという満足感があるらしい。だから悠子のほうから浮気でもして別れてくれぬ限り、自分は当分このままの関係を続けるという姿勢になっている。

だが、小板橋が衰えて行くのは、このところ半年ごとに気づかせられる。以前は少し飲んだほうが調子よかったのに、近頃では飲めば必ずと言っていいほど不能になる。

そんなとき、小板橋は攻撃をやめ、悠子に攻撃を命

じる。責められて悶え狂うときは、相手の体がどうであらうと気にならぬが、自分がサービスするとなるとどうしても小板橋の老いが目についてしまう。

小板橋は悠子を支配し切って安心したのか、近頃は女体を燃え立たす手続きをかなり省略して、悠子にサービスさせる。

「パパ、油断しちゃだめよ」

悠子は昨夜も全裸のときそう言った。彼女はその声を小板橋の顔でない部分へ向けて言ったのだ。だが、小板橋はゆとりのある笑い方をしただけであった。

それを言ったとき、悠子は別に浮気を考えていたわけではない。しかし、自分の前に平気で老いをさらす小板橋が、少し頼りなくなっていたのは事実である。

頑張つて、と励ます気分で言ったのだが、その言葉が今になって急に別な重味を持って来たのであった。

田村という美青年が、自分に関心を持って通ってい

たことを、悠子はそのとき並んで飲んでたしかめていた。

「田村さんのお仕事って、なあに」

悠子は子供に尋ねるように言った。田村はポケットから名刺入れをとりだし、悠子の前へ置いた。

「モーター・クラブ……何やるどころ」

「車だのボートだののクラブさ」

田村はとたんに能弁になり、レーサーの名前やむずかしい車やボートの名前を並べた。

田村雅之……いい名前だわ。二枚目の名前ね。悠子はそれを適当に聞きながら、名刺を見つめていた。

どちらも口説かなかった。

田村はなんとなく帰らず、最後までカウンターにいた。マネージャーを兼ねているバーテンの酒井が、
「おさき……」

と言って帰るとき、とがめるような目で悠子をみつめて行つた。

しばらく無人になった店の中で、二人は並んで坐っていた。悠子の胸に、忘れていた恋の泉が湧きだしているようであつた。

「酔つたわ。少し」

左へ体を傾け、煙草をつまんだまま田村にもたれた。

「ブランデー・サワーを三杯も飲んだからね」

悠子の頭を迎えるため、田村の体が少し右にひらいた。

すつぱりと埋まるようであつた。男の胸もとから、かすかな香料の匂いが漂い出していた。甘く清潔な匂いであつた。

田村は悠子に胸を貸したまま、じつとしていた。何も仕掛けて来ないので、悠子はすぐ体を起した。

「出ましようか」

「うん」

スツールを降りるとき、田村は手を貸した。右手を掴み腰に触れたが、いやらしい感じはなく、すぐ手をはなした。

「ちょっと待ってね」

悠子がそう言ってハンドバックの留め金をあけると、田村は頷いてトイレへ入った。

その間に悠子は手帖をとり出し、短い電話をかけ終つた。かけ先は或るホテルであつた。もう随分長い間使つていないから、廃業か代がわりでもしているのではないかと思つたが、昔どおりのうけこたえであつた。

「少し歩かない」

店のドアに錠をかけると、悠子はそう言って歩きだした。田村は要領を呑みこんだ歩き方でついて来た。背筋をのばし、前を向いてしゃんとした姿勢であつた。どこことなくよそよそしく、顔を知っている人物が見て